
僕は君のそばにいる。

高坂勇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は君のそばにいる。

【Nコード】

N5794A

【作者名】

高坂勇

【あらすじ】

演劇部所属している主人公 - 高城優香たかぎゆうかはある日、先輩にデートを誘われる。楽しんでいた優香の前で、先輩に異変が！？

ブローグ（前書き）

え、初めて投稿してみました。下手だと思いますが、よろしくお
願いします。

ブローグ

ブローグ

雨が、止んだ。

さっきまで激しく僕の体を打ち付けていたのに、いつの間にか、止んでいた。

雨雲がここだけを避けるかのように、ぽっかりと丸く切り取られている。その雨の中、惨劇が広がっている。

濃厚な鉄の匂い。数えきれない死体が散らばっていた。それらが誰だったのか分からないほど、無残な死体だった。

信じられるだろうか。――これは人間がやったことだ。

次の瞬間、僕は横に気配を感じた。

「綺麗になった？」

さっきまで、誰もいなかったはずのそこに、『そいつ』は、いた。

牛乳１リットル（前書き）

頑張ったつもりです。見てください！

牛乳1リットル

「世界中の誰よりも貴方が好き……どんな宝物より貴方が欲しいの」少女は小柄な体を震わせながら、僕を見つめる。少女は綺麗だった。腰まで伸びた髪は光沢を帯び、ふんわりと膨らんだ唇。長いまつ毛が茶色の眼をより際立てている。男として、この美少女からの告白を断れるだろうか。そんなの絶対に無理に決まっている。だが

……

「ストップストップ！ 高城が間を開けすぎだよ！」

横から見ていた先輩が、ぱんぱんと手を叩く。

「セリフ忘れたのかよ？言われたらすぐに『君とは付き合えない』だろ。」

そう。これは僕 - 高城優香が所属している演劇部の練習だ。劇の主役である僕が、ヒロインの女の子を振るシーンをやっている。

「すいません先輩」

「全く……本番まで時間が少ないんだぞ？」

「すいません……」

呆れたように溜め息を付く先輩に、僕は謝ることしかできない。その情けない僕の姿に同情したのか。ヒロイン役 - 櫛目彩先輩くしめあやが口を開いた。

「まあまあ中田君。きつと疲れちゃったんだよ。ここらで休憩しない？」

「しょうがねえな……」

劇の演出を勤める中田部長は時計を見て、十五分だけだぞ、と言って他の部員にもそのことを伝える。

「ふう」

ペットボトルに入った自家製のお茶を飲み、一息付いた。部長は高校生活最後の劇だから、気合いが入っているのは分かる。だが、だからと言って、休憩も挟まずに練習をするのはどうかと思う。演

技を失敗したのはそれが原因では無いのだけど。

（綺麗だったな、櫛目先輩……）

演技など関係なく、見とれてしまった。そりゃそうだ。この学校、いや下手をしたら県で一番の美少女なのだから。劇の中でも告白されるなど、他から見れば、さぞ僕は幸せ者であろう。

「優香君大丈夫？」

「うわっ!？」

櫛目先輩が下から覗き込む形で僕の視界に入ってきた。いきなりの不意打ち（しかも考えていた張本人にだ）に驚いてお茶が入ったコップを落としそうになる。

ギリギリでそれを免れほつとする僕に、櫛目先輩は不機嫌そうな顔で、

「なになに? 優香君。その驚きようは？」

「突然目の前に現れたら誰だって驚きます。それと……」

櫛目先輩が、なに? と可愛らしく首を傾げる。高鳴る鼓動。

聞こえるはずが無いのに、咳払いをした。

「名前で呼ぶの止めてください」

「え? 良いじゃない別に。可愛い名前だから、呼びたくなっちゃうのよ」

彼女は褒めているつもりなのだろうが、僕は自分の名前が大嫌いだ。

『優香』だなんて…まるつきし女の子の名前。

「…もしかして、優香君は自分の名前が嫌いなの？」

「そうですよ。大嫌いです」

「女の子みたいだから? それを言うなら顔も身長もそうじゃない」

気にしていることを指摘され、少しむつとする。

「女顔で悪かったですね。だけど、身長を伸ばすために毎日牛乳いっぱい飲んでます!」

反論する僕を見つめ、先輩は必死に笑いを耐えている様子。10秒ほど肩がふるふると震え、ついに…

「あっははは!」

…爆発した。僕は母親譲りの女顔

「…何なんですか」

「ごめんごめん、でも…」

再び爆発。「…何がそんなにおかしいんですか？」

僕が聞いても、笑いが止まらないらしく答えられない。

たつぷり1分は笑っていただろうか。目尻に涙を浮かばせながらも、ようやく先輩が口を開く。

「だって…あまりにも優香君が言い返す姿が可愛かったんだもん」
そこでまた一つ吹き出すと、

「牛乳をいっぱいって、どれくらい飲んでるの？」

「…1リットルくらい」

「え！本当？ 牛乳パック丸ごと？」

僕が頷くとまたもや笑い出した。

「優香君はちっちゃい方が可愛いのに」

「僕は本気で悩んでいるですよ？」

女顔で背が小さいので、よく女の子に間違われる。声が高いのも原因の一つだ。それが僕は嫌でたまらない。

「本気で？」

「そうです、本気で背が高くなりたいです」

何もそこまで、と言いたそうだった。でも、町を歩いていて男にナンパされたら、誰だって本気になると思う。

「仕方がないなあ」

先輩が突然立ち上がり、微笑んだ。

「可愛い後輩の悩みを、全部聞いてあげる。今日練習が終わったらどっか食べに行こう！」

「え！？」

いきなりの発言に驚く。僕が？ 先輩と？

「あ、あの先輩…」

「大丈夫、私の奢りだから」

元気よくVサイン。僕が何かを言う前に、じゃあそうゆつことで、

とどこかに行ってしまった。

「何なんだ一体……」

僕は1人呟いた。家に空き巣が入ったのが分かった時の心境と
言えば分かりやすいだろうか。とにかく途方にくれていた。

そして――自分の胸に渦巻くこの期待感は、何なんだろうか。

第2章 衝動

「それじゃ、乾杯」

「コーラで乾杯って…」

目の前の席で元気よく飲み物（コーラM）を掲げる先輩に、軽くツツコむ。

「まあ良いじゃない。気分よ、気分。ほら」

「まあ先輩の奢りですから従いますよ」

容器を合わせ、乾杯、と二人で言い、コーラを飲み始めた。先輩はプラスチックハンバーガーを5個にポテトL（本来そんな大きいモノは無いが、先輩は、知り合いの店長に頼んで特注品を作ってもらった）を食べている。

その食べっぷりは見事としか言いようがない。

「優香君も食べたい？」

半ば感心して見ていた僕に聞いてくる。じっと見つめていたから勘違いしたのだろう。

「いえ、遠慮します」

「なに？ ダイエットでもしてるの？ いっぱい食べないから大きくなれないのよ？」

「ほつといてください。このままじゃあ先輩は横に成長していきますよ？」

先輩の表情が凍った。

「……」先輩が激しく反論してくるだろうと予想していた僕は、先輩のまさかの反応に困惑していた。

「せん、ばい？」

呼び掛けても反応がない。ここでようやくこと重大さに気付く。ほんの反撃のつもり、完璧に冗談の一言で、彼女を傷つけてしまったのかも…

「あの、先輩。その…ごめんなさい。気にしてたんですね」

冷たい表情のままの先輩の眼を見ることが出来なくなり、自分の膝小僧を見ながら、謝罪を続ける。「それなのに僕、無神経なことを言って…本当に…」

それを遮るように、目の前から笑い声が響いた。もちろん声の主は先輩なのだが、僕はさつきと違う意味で困惑する。

「先輩？　なに笑ってるんですか？」

「いや、ちよつと君をからかいたくなつてふざけてただけなんだけど……優香君の謝る姿があまりにも可愛くて……」

笑いキノコを食べたかと疑いたくなるほど、顔を真っ赤にしてお腹を抱えていた。「優香君、プリーティー過ぎだよ……」

「そんなこと言われても嬉しくありません」

僕はそつぽを向きながらコーラを啜る。

「ごめんごめん。拗ねないで」

謝っている最中も先輩はポテトを摘んでいる。僕は機嫌が悪いのも忘れ、呆れてしまう。

「先輩、本当に太りますよ？」

「あゝ、女の子に太るとか言ったらダメだよ」

先輩は口を尖らせてお腹を擦りながら、

「何かを食べても食べてもお腹が空いちゃうんだよね……成長期だからかな？」

「関係無いと思いますけどね……どうしたんですか？」

じつと見つめるくるので、恥ずかしくなつて視線を外す。

先輩はおもむろに立ち上がると、僕の横に座った。

「で？　優香君の悩みは何だね？」

「いきなり何ですか？　悩みなんてありません……」

「嘘だね」

ちつつち、と指を振りながら、先輩が僕の肩に手をかけ、「君を見ていれば分かるよ」

「何がですか？」

僕を覗き込む先輩の眼は、真剣そのもの。

――もしかして、僕の気持ちが……

誰にも打ち明けていない想い。演劇に興味があって部活に入っ
たワケではなかった。

「優香君は、好きなんでしょう？」

やっぱり、バレていた。一番知られたくない人に。

「それは……」

「良いの！ 全部言わなくても！ 言わなくても私は分かっ
て、私はちゃんと知ってるから！」

先輩はさらに顔を強張らせて、「恵ちゃんのことが好きだっ
て、私はちゃんと知ってるから！」

「は？」

ちなみに、恵と言う人物は、僕と同じ演劇部でクラスメートの女の
子だ。 呆然としてる僕を無視をするかのように（実質無視され
ているが）先輩は話を続けた。

「大丈夫！ クラスメートの女の子に恋をするのは罪じゃないから
！」

――そんなワケ無いでしょう。

心の中でツツコンだ。それがいけなかったのかもしれない。口
ではつきりと否定しなかったせい……

「やっぱりそうなのね？ 恵ちゃんが好きなのね？」

……すっかり高城優香の好きな人＝恵ちゃんと公式が立ってしま
った。彼女に恋をしている僕には、残酷な公式だ。

「先輩、違いますよ。僕は別に……」

弁解はもうすでに遅い。先輩は妄想にふけっていく。

「よし。私が二人を幸せにしてみせる！ まずは一緒に帰らせて

……」

時間が経つことに、さらに妄想はエスカレート。

「そして二人は眠れぬ夜を……夜中に少女の声が木霊するってか？」

もはや、酔っ払いに近くなってきた。いや、自覚があるあたり、酔っ払いより質が悪い。

「先輩、違いますって。第一、何で恵何ですか？」

一旦落ち着かせようと言うが、

「お！ もう名前で呼ぶまでの仲なのね？ ラブラブじゃ〜ん」

「幼馴染みだから名前で呼び合うクセが付いちちゃっただけです。恵のことは本当に何にも……」

僕は言葉を最後まで言えなかった。先輩は苦悶の表情をして、心臓の辺りを押さえている。とても、冗談とは考えられない。

「先輩！ 大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫……ごめんね、優香君。私、もう帰るね」

「送ってきますよ！ 大丈夫何ですか！？」

彼女は、大丈夫大丈夫、と言うと、突然走り出した。凄く早い。あんなに元気なら、やはり僕は遊ばれていたんだろう。

「帰るか……」

先輩の奢りのはずだった代金を支払い、僕は家へ足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5794a/>

僕は君のそばにいる。

2010年10月25日00時27分発行